

業平〈なりひら〉と公光〈きんみつ〉（芦屋市業平町）

むかし津の国芦屋の里に公光〈きんみつ〉というものが住んでいました。若い時から伊勢物語〈いせものがたり〉をよんで、たいへん業平〈なりひら〉にあこがれていました。

ある夜の夢に美しく咲き乱れた花の中に、真紅〈まっか〉なはかまを召〈め〉された女と、束帯〈そくたい〉をつけたやさしい男とが、伊勢物語の草子〈そうし〉を持ってたたずんでいました。あまりの美しさに、おそぼの翁〈おきな〉に「あのかたはどなたさまでございますか」とたづねました。翁〈おきな〉は「あのかたこそ伊勢物語のご主人業平さまで、女のかたは二条の後〈きさき〉さまでございます」と答えました。

「ここはどこでございますか？」とききますと、「ここは都の北山かげ、紫〈むらさき〉の林。」と教えられました。

ハッと夢がさめました。あまりのふしぎさに、あこがれの都、夢の雲林院〈うりんいん〉を尋ねようと、芦屋の浦を旅立ちました。名残りの月が西の海にかたむいて、芦辺〈あしべ〉をとびかう虫〈ほたる〉の火を、海女〈あま〉のたく火かとあやまり、塩やくけむりが松かげにたなびくなかを、西の宮のひる子の宮につきました。

西宮のえびす社におまいりして、尼崎をすぎ難波〈なにわ〉の津〈つ〉をわたって都路に上り、さくらの花満開〈まんかい〉の雲の林につきました。

紫野〈しの〉の雲林院について、花の一枝を折りとりました。すると一人の翁〈おきな〉があらわれて、それをとがめしたので、「私は摂津〈せつづ〉の国芦屋の里の、公光〈きんみつ〉と申す者で、伊勢物語の業平さまの夢を見て、ここまで尋ねてきた者でございます・・・。」といいました。

すると翁〈おきな〉は「今夜はこの花のかげにいなさい、奇特〈きとく〉なことがあって、伊勢物語の秘事〈ひじ〉を授〈さづ〉かることであろうから。」といって、夕がすみの中に消え去りました。

やがて夜になり待っていると、夜半〈よなか〉に業平の霊〈れい〉があらわれて、伊勢物語の秘密〈ひみつ〉を語ったり、昔をしのんで夜遊びの舞楽〈ぶがく〉を奏〈そう〉したりしました。夜明けに公光の夢がさめました。



業平〈なりひら〉は平城〈せいぜい〉天皇の皇子阿保親王〈あほしんのう〉の第五子で、母は桓武〈かんむ〉天皇の皇女伊都〈いと〉（伊登）内親王で、天長二年八月の誕生〈たんじょう〉で、このとき父阿保親王は三十四才でありました。

業平は天長三年兄の仲平〈なかひら〉、守平〈もりひら〉らとともに在原朝臣〈ありわらのあそん〉の姓をたまわり臣下の列にくだりました。しだいに出世して、五十一才のとき従四位上になり、元慶〈がんぎょう〉四年五月二十八日五十六才でなくなりました。業平は美男子で才学にとみ、和歌に秀でていた人でした。

伊勢物語は業平の歌をあつめたものだといえます。

芦屋の里は父君阿保親王の領地〈りょうち〉であったので、業平も芦屋にすんでいたといいつたえております。今も芦屋に「業平屋敷〈なりひらやしき〉」のあとがのこっていて、業平町、業平橋などの名がついております。